



# あれから40年

桑野 巍

時は昭和45年3月。場所は千里丘陵。「小雪混りの雨は万国博の開会式を清めてくれました。必ず大阪万博は成功します」。左藤義詮大阪府知事のあいさつは名調子だった。あれから40年が過ぎた。そのころの大阪のまちは万国博開催で湧いていた。官民一体で「万博を成功させよう」の大合唱が起こり、私もその中にいた。大阪は当時全国でも元気のあるまちな象徴的存在だった。

懐しさや思い出もあってある日、千里の万国博跡地の公園を歩いてみた。どの辺りにどこの国のパビリオンがあったのか、どの企業の出展館があったのか、さっぱり思い出せないのが残念だ。当時大阪府庁記者クラブと万博記者クラブのかけ持ち記者であったのにもかかわらず、記憶が忘却と化したのだから情ない。忘却とは偉大なりなのだろうか。

それでも千里会場予定地の用地買収に手間どり、心配屋記者集団の仲間たちと徹夜取材し「何とかならぬか万国博」という裏標語が流行していたことは覚えている。その裏標語を見事払拭したのは当時の田中樞一副知事お一人で「何とかなるよ」が口癖だった。表標語はみんな知ってる「進歩と調和」だった。このころの大阪府は左藤知事をはじめ職員全員が万博成功運動に取り組み、前向きの一体感が見てとれた。行政にも勢いがあった。

万博開催を機に大阪圏は道路、鉄道、飛行場整備などの公共事業が着実に進められ、目を見張るものがあったからかも知れない。これらの事業は地方自治体だけでは推進できず政府や東西財界の全面的な協力も取りつけたから“大阪の結束力”の見せ場でもあった。この一体感と実行力が会期半年間の総入場者数6421万人という未曾有の観客を集めたといってよい。1970年は日本経済の上昇期で、大阪のプレステージも急上昇、いま振り返れば「万博の時がピーク」だったとも言える。

当時万国博協会の事務総長という大役を無難にこなし、後に東京都知事を務められた鈴木俊一氏（東京都出身）は「大阪万博はタイムリミットのある国際的大事業としてはオリンピックに似ている。この万博を成功させた大阪の総合力は素晴らしい」と、閉会後に大阪のチーム力を評価し、「大阪万博の成功

はその名を世界にとどろかした」と語っていた。

表面には出なかったが、大阪人たちが万博の成功に酔っていたころ、記者クラブではこの跡地をどうするのが話題に上っていた。太陽の塔は残すが各パビリオンは撤去して大半は地域住民のための文化的公園整備が最有力だった。記者たちの無責任発言は幾多もあったが、私はここに国連の地球環境を守る機関を誘致したらと真面目に発言したことを覚えている。また、将来道州制が実現するのであれば「近畿州」(?)の州庁舎を建設するとよい、と提案したことも思い出した。

国際社会の中でも大阪万博の成功は経済、文化の両面で高い地位を得たが「調子に乗っていないか」という場面にも出会った。心配屋記者は「これで大阪の成長は止まり、次は下り坂」というマイナス思考を披露し「良いことばかりはない」と言い放った。そのころ、大阪府は30年先の長期ビジョンを策定、府の人口は昭和75年には1050万人に達するとはじいたのだ。これに対し、府の面積に1000万人超が住むのは過密、見通しが甘くないかという声も出ていた。40年が過ぎてみれば、行政の長期ビジョンとは、その確度とはを問いたくなる。

大阪府政を取材していた中で、業務執行体制単位の簡素化、指揮命令体制、人材育成とモラル向上、責任の明確化、管理能力の発揮など“係長行政”を学んだのもこのころだ。また、公共事業のあり方や人口のドーナツ化現象、公害対策も取材した。しかし、この40年間で府県のあり方も行政組織も変わってしまった。一方、大阪企業の本社が首都圏に移り、産業構造も変わった。総じていえば「強い大阪」が後退し「平凡な大阪・弱い大阪」が定着してしまったのは残念と言うほかない。

この先の40年がどうなるのか、誰も読めない。とくに地震、海面水位の変化、台風、集中豪雨が予想される中で、大阪の社会資本の整備は万全なのかが気懸かりだ。人口が減少しても安全な強い大阪のシナリオ策定が急がれる。そして大阪人全員のパワーを結集して「豊かな大阪」を構築してほしいのだ。

(自治大阪編集委員会顧問  
時事通信社元大阪支社長)